地域の象徴
＜満濃池＞

1.　位　置

香川県仲多度郡まんのう町

2.　規　模

堤　高：32.0 m

堤　長：155.80 m

堤体積：218,000 m^3

貯水量：15,400,000 m^3

受益地：4,600 ha

3.　経　緯

満濃池は西暦 701～704 年，大宝年間に讃岐の国守，道守朝臣により創築されたと伝えられている。その後 818 年に決壊，821 年に朝廷より遣わされた築池使が復旧に取り組んだものの難航し，同年中に弘法大師空海を派遣して再築を遂げた。しかし 851 年に再び決壊，約 450 年にわたって放置された後，1631 年にようやく再築された。最後の決壊は 1854 年，安政南海地震などによって底樋が緩んだために生じ，1870 年に復旧された。

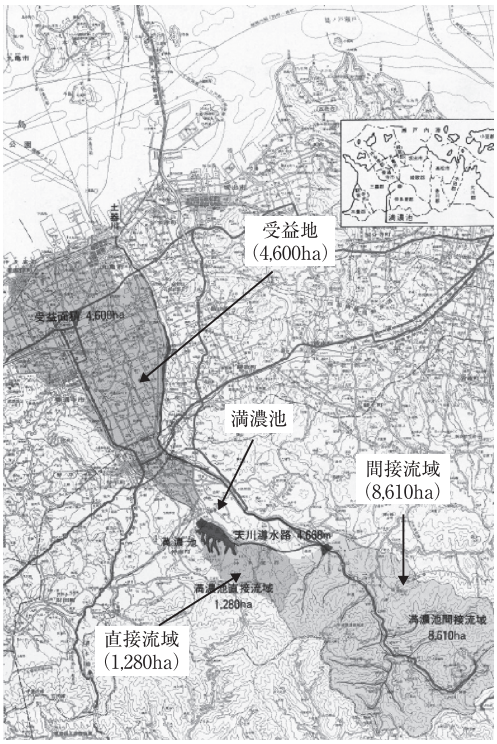

図-1　満濃池の流域と受益地

明治時代以降，2 回の嵩上げ工事，および旧堤体下流側への新堤体の建設によるさらなる嵩上げを経て，現在に至っている。現在における流域と受益地を**図-1** に，新旧堤体の断面を**図-2** に示す。

地元の町名となっていることからもわかるように，満濃池は一水利施設を超えた，地域を象徴する大きな存在となっている。例年 6 月 13 日には送水を開始する「ゆる抜き」と呼ばれる行事が行われ，数々の来賓が列席するとともに，多くの市民が満濃池や用水路のほとりで見守る中，農業用水が送られ始める。「ゆる抜き」の語源は，樋門をふさいでいた筆木を揺らしながら抜いたことにあるといわれており，ゲートを開くことで**写真-1** に示す取水塔から取水・送水を開始する現在においても，その名前が受け継がれている。

4.　技術史

建設時には木製の底樋が用いられおり，度々の交換を余儀なくされていたが，1853 年に石造りとなった。しかしそれも翌年に地震などで損傷し，決壊の原因となった。1870 年の復旧時における貯水量は，5,846,000 m^3 であった。

1905 年には第 1 次嵩上げ工事（0.87 m）に着手，翌年完成し貯水量は 6,678,000 m^3 となった。続いて 1927～1930 年には，第 2 次嵩上げ工事として堤体を 1.5 m 嵩上げして貯水量を 7,800,000 m^3 にすると同時に，財田川からの承水隧道を建設した。そして

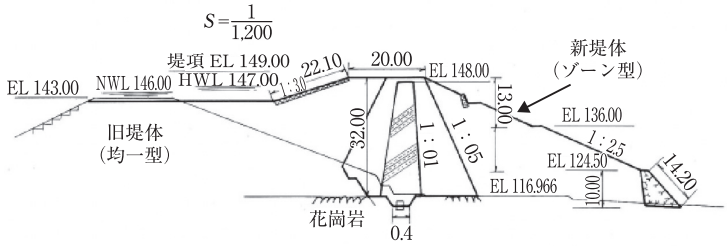

図-2　新旧堤体の断面

写真-1　現在の取水塔

1939年の大干ばつを契機に，新堤体の建設による6.0 mの嵩上げと，土器川から取水するための天川頭首工（**写真-2**）と天川導水路（**写真-3**）の建設に着手した。1959年に完成したこの第3次嵩上げ工事により，貯水量はそれまでの約2倍である15,400,000 m^3に達した。

写真-2　天川頭首工

写真-3　天川導水路

5.　特筆すべき技術

空海の指揮によって築造された満濃池堤体の特徴としては，①谷の最狭部よりにやや上流側に位置し，円弧状に湾曲している（**写真-4**），②堤体左岸側の岩盤を開削して余水吐を設置し，洪水時に堤防の決壊を防いだ，③堤体の水際に水たたきを設け，崩壊を防止した，の3点が挙げられる。左岸側に位置していたこの余水吐は，お手斧岩（おちょうないわ）と呼ばれており，国内で初めて設けられた余水吐であるといわれている。またこの名の由来は，岩盤の開削に手斧のような工具を使ったという伝承にある。第2次嵩上げ工事前まで用いられてきたが，現在は堤体内に埋没しており，代わって右岸側に新しい余水吐が設けられている。

写真-4　円弧状の堤体

6.　歴史に名を残した人々

西嶋八兵衛：1184年5月，洪水で決壊した満濃池の堤体は，長きにわたって復旧されないままであった。讃岐領主の命により，その再築の指揮に当たったのが西嶋八兵衛である。築城の名人といわれた大名，藤堂高虎の家臣である八兵衛は，高虎とともに大阪の陣で失われた大阪城の修築で活躍し，その後普請奉行として1625年に高松藩に招聘された。在任期間中，八兵衛は治水，利水や湿田改良に奔走し，90余りのため池を築造した。その中の1つが，決壊したまま長く放置されていた満濃池であり，設計と施工には築城に関する技術が応用されたのであろう。これらの事業により領主生駒氏の石高は，17万石から23万石にまで増加した。

（中国四国支部　石井将幸）